

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

環境問題に多くの人の目が注がれるようになって以来、「人間と自然との共存をめざして」などと、よくいわれるようになった。もつとも自然といっても幅は広く、大気、水、土のようなものから、人々の暮らしに密接するゴキブリ、カ、ネズミ、スズメ、ヒヨドリなどもあるし、シカ、サル、ツキノワグマ、ヒグマ、クジラなど大型野生動物、さらには森林や草原に至るまでさまざまなものである。

生物進化の歴史からすれば、人間も自然から発して、現在も片方の足は自然のなかにつつこんでいる。学校で教える「生物」のなかでは、人間を扱っているが、動物としての人間（からだのつくりと働き）に重点があった。また「人間と自然」といった単元もあるにはあるが、そこでは「資源・エネルギーとその利用」といった扱い方になっている。これでは「人間と自然」の問題についての基本的な考え方を深めることにはならない。かつて西欧（西ヨーロッパ）の生態学者たちと一緒に国内旅行をしたあとで、同じ問題について討論したことがある。その時、現在ローマ大学教授のピニャッティが、伊勢神宮その他各地にある社寺林は、日本人がいかに自然との共存をうまく進めてきたかの実証だとほめてくれ、くすぐったい思いをした。彼がいうのには、西欧のキリスト教会の周りには、いっさいそういう森はない。自然は征服する相手としてのぞみ、それによって西欧は近代科学を発展させたのだという。

だが、ピニャッティ教授にほめられるほど、日本人は自然愛好国民なのであろうか。日本人の自然観というものを考えてみると、原始的自然はむしろ苦手で、手なずけてペット化した自然に、より愛着を感じるように思えてならない。

前に私は、日本の四季と動植物に関する本の編集に関係したことがあるが、ペット的ではなく野性的な動植物をテーマにしようと話題に出すと、「一般的に親しみがないから、俳句の題材になるようなものがよい。」という意見が強かった。これが日本人の自然観なのかと考えこんでしまった。歌によまれ絵にかかれる花鳥風月は、生け花、盆栽などにも相通するものがあるであろう。庭園も、一般に風景のミニチュア化をとまなうものである。ドイツの田舎にしばらく滞在した人に聞いた話であるが、その人は、訪ねてきた人には、いつも周辺の自然林の観察路を案内することになっていた。日本人の場合は「歩いていてもべつに何もないんですね。何の設備もないんですね。」といった感想が返ってきた。ところが西欧の人の場合は、一様に「すばらしい自然に接することができた。心が洗われるようでとてもよかった。」といった反応だったという。

日本各地に「県民の森」のようなものがさかんにできた時期があるが、私はその一つの例にかかわったことがある。それは原生林ではないが、明治以後長く人手が入らなかつたすばらしい自然林であつた。これを「県民の森」にするのには自然観察路があれば十分と思ひ、そういう意見を述べたことがある。ところがいざ開闢というので行ってみると、展望塔あり、茶室あり、外国樹種の見本林ありといった具合で、まったくがっかりした。「県民の森」ということで郷土の自然を楽しんでもらうだけでよいのに、どうしてこんな施設にしたのかと尋ねたところ、「これは私の腕で予算をとって施設を作つたので、当然ほめてもらえるものと思つていた。あなたはこういう事業にまつたく理解がない。」という。この人は行政官として

ては有能なのであろうが、自然をどういう形で維持すべきかについて、正しい認識がないようにみえて、まことに残念なことであつた。

ところで、人間と自然との共存に關しての身近なテーマとしては、人間と野生動物との共存の問題がある。

千葉県には二ホンザルが現在約四千匹いる。戦後まもなく、二ホンザルの数千匹程度の小さな群れが、それぞれ決まつた行動範囲をもつて生活していることが調査の結果判明した。そしてその一部の富津市の「高岩山二ホンザル」が、昭和三十一年に国の天然記念物として指定された。

その後、研究の手段としても観光目的からも餌づけが行われ、個体数もふえ、農作物被害などいわゆる猿害問題がおこつた。県には猿害対策協議会が発足した。有害鳥獣駆除ということで、一部はワナで捕獲することが許可されたこともたびたびあつた。それをめぐつて地域住民、研究者、自然保護団体などの間でいざこざが絶えなかつた。

国の指定を受けている二ホンザルを捕獲したり射殺したりするのは、けしからんと研究者がいえば、住民側ではどれが地域指定の文化ザル（文化庁が指定したサル）かわからないので名札をつけてくれ、大都會の東京からやつてきた研究者から、自然を大事にせよといわれても、こちらには生活があるのだから、そうはいかぬ、といった議論がはてしなく続いた。そのころ、現地には「サルか人か」といったピラがはられていたことを思い出す。

結局、管理団体である富津市と君津市によつて、サルによる被害防止委員会、サルによる被害防止事業調査団が結成され、国費や県費の補助も受けて、被害の実態調査、生息環境、群れや個体数の調査などが始められた。そして国指定地域を本拠にする群れを電氣を流した柵で囲んで、そこに追いこみ、スギ、ヒノキの県有林を伐採したあとは、昔の彼らの生活の場であつた薪炭林の状態にもどすことにした。県有林をサルの住みかにもどすというのは、県として、たいへんな決断だつたと思う。まだ完全に成功したわけではないが、各方面の協力によつて問題解決の方向に少しずつ前進しているといえよう。前に地域の農家をまわつて意見をきいたことがあるが、サルの赤ちゃんもかわいいし、被害さえひどくなければ、決して殺したくないとのことだつた。指定地域のサルも囲いの中の生活では快適でないであらうが、がまんをしてもらい、住民側も指定地域はサルに受け渡してがまんする。おたがいががまんできなないものだらうか、というのが現在の状況である。

（注一）社寺林Ⅱ神社全体を囲むような森。神社林ともいう。

（注二）薪炭林Ⅱ薪や炭を得るための林。

【二】

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

二学期の終業式の日、さとするたち四年生八人は、雪が吹きこむのを防ぐ雪囲いをするため、鳥小屋の前に集まった。みんなの話は、いつしか、お正月のことになった。

- 問一 ―― 1 「くすぐったい思い」とありますが、ほめてもらったのにそういう思いをしたのはなぜですか。
- 問二 ―― 2 「手なずけてペット化した自然」とはどのような自然ですか。
- 問三 ―― 3 「まったくがっかりした。」とありますが、それはなぜですか。
- 問四 ―― 4 「サルか人か」というビラは、どういうことを言おうとしたものと考えられますか。
- 問五 ―― 「ところで」より後の文章の内容として正しいものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。
- ア 地域の農家の人々は、サルの赤ちゃんがかわいいから、決してサルを殺したくないと思っている。
- イ 伐採した後の県有林を本来の自然の形状である薪炭林の状態にもどすことで猿害問題は解決した。
- ウ 猿害問題に対して、地域住民・自然保護団体・研究者は協力しあつて問題の解決をはかつてきた。
- エ 猿害問題は、観光目的の餌づけだけが原因ではなく、研究の手段としての餌づけにもよっている。
- オ 住民の提案によるニホンザルに名札をつける方法も、猿害問題の根本的な解決にはならなかった。

町の工場に勤めている与一の父や、隣子の父のほかは、みんな出稼ぎに行っていた。今年の大冷害のために、ほとんどの家が、自分の家で食べる米さえとれなかった。父親たちは、実の入らない青い稲を早ばやと刈とり、出かけて行ったのだった。農作業の始まる春までは、出稼ぎでかせぐが、正月をに数日間だけ帰ってくるのだ。

「ナアナア、おれんと三十日。」

さとするも、父親たちがいつ帰ってくるかという話に、すぐとびついた。

「私のおとうさんは、二十八日。」と、明美がいつて、そばにいた琴乃にきいた。

「コトちゃん家は？」

「エッ、私人家……。」と、琴乃は困った顔をしていいしぶった。

「いつよ？」

みんなが注目すると、ますます琴乃はいいだしくそうにした。

「シーと。」

下をむいた琴乃が決心したように、しゃきつと前をむいて、ニカニカッと笑った。

「さーて、いつでしょう。」

みんなは口ぐちに、三十一日とか、二十九日とかいった。どの答えにも、琴乃は笑いながら首をふった。

「みなさん残念でした。私のおとうさんは働き者だから、正月は帰って来ないのですよ。みんな、ハズレハズレ。」

なんだか、みんなはバツが悪くなつてしらけた。琴乃だけが、ガハハハと笑つて元気なのだった。さとするは琴乃の顔が見られなかった。

先生が校舎から出てきたので、先生のまわりに集まった。

鳥小屋の雪囲いは、体育館の南側に置いてある板を使う。幅は三十センチぐらいしかないが、長さが二メートル近くあるから、ふたりで一枚ずつ運ぶことになった。みんなは競争するように、とんでいった。

さとするは、琴乃が急に静かになつてしまったことに気がついていった。

次つぎにみんなはペアになつて運んでいく。結局、さとするが琴乃とペアになつて、四枚目の板を運ぶことになった。

「セーノ。」と、さとするが声をかけた。

「なんだ、軽い軽い。行へ行へ。」

拍子ぬけた勢いで、板がななめになった時、

「アッ！」と、琴乃が声をだした。

「ウヒャー！」と、さとするも悲鳴をあげた。

板の裏側に、黒に赤いもののあるてんとう虫や、オレンジ色に黒の点のあるてんとう虫が、何十匹とかたまつてくっついていたので。一瞬間、さとするは背中がゾワツとした。

てんとう虫の背中は、つやつやに光つて色も鮮やかにかがやいていた。少しも動かない。体をびったり寄せ合つて、寒さから身を守っているように見えた。てんとう虫たちは板の下で冬ごもりをしていたのだった。まあるかたまっている姿は、大きな大きな家族が、なかよく春を待っているようだった。琴乃もじつとてんとう虫を見ていた。

「なんだよ、おまえたち、そんなに集まつちゃつてさ。」

琴乃がひとりごとのようにつぶやいた。

琴乃のいった意味が、さとるにはすぐにはわからなかった。

てんとう虫を見ている琴乃の顔がさみしそうだった。さとるは、いつもタオルではちまきをして笑っている琴乃の父親の顔を思い出した。琴乃は母親とたつたふたりで正月をむかえるのだなと思うと、胸がジンジンした。

いつも元気で、男まさりの琴乃が、こんな顔をもっていることに驚いた。そして、次の瞬間、さとるはもつと驚いた。

琴乃が、人さし指でてんとう虫のかたまりのまん中を、すーっとなでるようにこすったのだ。二十匹ばかりのてんとう虫がバラバラと雪の上に落ちた。雪の上で、黒や赤やオレンジがキラキラして、宝石のようだった。

さとるはハッとして、息をのんだ。ひっくりかえったてんとう虫の足が、コショコショ動いていた。やめろよといったかったけれど、あまりの意外さにことばが出てこなかった。

それで、板をおして、琴乃を歩かせた。ちょうどそこに、与一たちが二回目の板を運ぶために走りこんできた。

さとるは、とつさに雪の上の宝石に足で雪をかけて、見えないようにかくした。ほかの者には、雪の上の宝石を見せたことはないような気がしたからだ。自分のやったことも、琴乃がやったことも、なにがなんだか、さとるにはわからなかった。板をぐいぐいおして前に進んだ。どこかでちらつと、てんとう虫は死んじやうなと思っただけだった。

教室で先生が、よいお年を！ というと、二学期は終わりになった。

さとるは、琴乃のことが気になって時々見ていたが、すっかりいつもの琴乃にもどつて、与一たちとふざけていた。二学期になごりおしくなつたように、みんなはすぐには帰らなかつた。しばらく、体育館でドッチボールをした。さとるは思いきり汗をかいたので、校舎を出ると背中がひやつとした。

外は雪がふつていた。空は一面グレーがかつて、暖日山もだんだんとかすんできた。雪囲いのできた鳥小屋をのぞくと、チョロがまたつつかれていた。さとるは、ガンガンととびらをけて、にわとりを驚かせた。

校門の方を見ると、赤いジャンパーを着た琴乃が帰って行くところだった。琴乃を見ると、父親と母親の顔がうかんだ。ひっきりなしに落ちてくる雪で、琴乃はぼうつとかすんでいた。さとるはポケットの中で、二十五、二十六、二十七……と指をおつて数えてみた。すっかり暖日山は見えなくなつていった。雪は後から後からふつてくる。さとるが空をあおぐと、ずっと上の方で、てんとう虫が螺旋を描きながら飛んでいるように見えた。春まで数えるといくつになるだろうと、さとるは思った。

(最上二平「雪の上の宝石」による)

(注) 行へ行へこの地方の言い方で「行こう行こう」の意味。

問一 — 1 「すぐとびついた。」とありますが、ここからさとるのどのような気持ちが読み取れますか。

問二 — 2 「さとるは琴乃の顔が見られなかった。」とありますが、それはなぜですか。

問三 — 3 「なんだよ、おまえたち、そんなに集まっちゃつてさ。」とありますが、ここから琴乃のどのような気持ちが読み取れますか。

問四 — 4 「とつさに雪の上の宝石に足で雪をかけて、見えないようにかくした。」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 琴乃のやったことの意味はよくわからなかったけれど、琴乃の心の中が他のみんなの目に触れないようにしたかったから。

イ てんとう虫があまりにきれいだったので、それを他の者には見せず、自分と琴乃だけのなつかしい思い出にしたかったから。

ウ てんとう虫がまるで宝石のように光っていたので、それをほかの者に捕まえられたり傷つけられたりしたら琴乃がかわいそうだから。

エ 琴乃がやったことはよいことか悪いことかわからなかったけれど、てんとう虫がかわいそうで、後で助けてやろうと思ったから。

問五 — 5 「春まで数えるといくつになるだろう」とありますが、さとるはどのようなことを考えているのでしょうか。

【三】 次のカタカナの部分に漢字に直しなさい。

- | | | | |
|----|------------------|----|-----------|
| 1 | ザッシを買う。 | 11 | キャベツをキザむ。 |
| 2 | キコウがおだやかだ。 | 12 | タテに並ぶ。 |
| 3 | ケンチクの仕事につく。 | 13 | よだれをタらす。 |
| 4 | トウブンをひかえる。 | 14 | 町に雪がふる。 |
| 5 | 才能をハッキする。 | 15 | 用事をします。 |
| 6 | マンガースはハブのテンテキだ。 | | |
| 7 | 旅行してケンブンをひろめる。 | | |
| 8 | 遠くにサンミヤクが見える。 | | |
| 9 | くわしい説明はショウリヤクする。 | | |
| 10 | ヨウショウのころをなつかしむ。 | | |